京都産業大学
ことばの科学研究センター
2025 年度 第 4 回研究会

10 月 22 日（水）14:00～16:00
4 号館 2 階総合学術研究所会議室

江戸の文学者
荒木田麗女の歴史物語表現

雲岡 梓（文化学部准教授）

伊勢神宮神官の娘、荒木田麗女（1732-1806）は、平安王朝を舞台とする擬古物語や、天皇・武将等の事蹟を綴った歴史物語を執筆した。中でも、後醍醐天皇から後陽成天皇までの歴史を記す『池の藻屑』と、高倉天皇と安徳天皇 2 代の歴史を記す『月のゆくへ』は、麗女の代表作であるとともに、日本の歴史物語の系譜の最後尾に位置する作品と評価されている。江戸時代に至るまでの歴史物語の系譜を辿りながら、麗女の歴史物語における文章表現の特徴を明らかにする。

言語類型論の視点からみたドイツ語オノマトペ表現の描写性：
ミヒャエル・エンデの『モモ』を中心に

島 憲男（ことばの科学研究センター員・外国語学部教授）

発表者はこれまで宮沢賢治作品のドイツ語訳を中心に日本語を原典とする作品に生起する擬音語・擬態語表現がどのようにドイツ語に翻訳されているかを分析してきた。本発表では、新たにミヒャエル・エンデ（1929-1995）の『モモ』からのデータを加え、ドイツ語のオノマトペ表現が具体的に何をどこまで描写しているのかを言語類型論の研究成果の中で検討していきたい。